KAMAISHI SHINBUN

復興釜石新聞

2014年（平成26年）
1月22日（水）
第262号

WE DO NOT LOSE 負けねど釜石！ WE DO NOT LOSE

きょうの紙面

〒026-0044 釜石市住吉町3番3号 TEL 0193-55-4713 FAX 0193-55-4715 Eメール kamaishi-shinbun@kmail.plala.or.jp

「おかえりなさい 花露辺へ」

災害住宅入居者歓迎会

花露辺地区に戻って来た住民を囲んで開かれた地元町内会の歓迎会

立派に完成した花露辺地区災害公営住宅

震災で大きな被害を出した釜石市内の半島部で防災集団移転促進事業による災害公営住宅建設事業が最初に終了した唐丹町花露辺地区で19日、これまでに入居した10世帯の歓迎会が開かれた。同住宅1階の集会所には地元住民や事業関係者ら約60人が集まり、仮設住宅から戻った住民を歓迎、〝花露辺の再スタート〟を喜び合った。手作りの祝い膳とともに、鵜住居町出身の民謡歌手佐野よりこさんらが歌や踊りを披露し盛り上げた。

ステージの正面に「おかえりなさい」の横断幕が掲げられた。歓迎会を企画した花露辺町内会の下村恵寿会長は「震災から2年10カ月。海岸施設の復旧はまだ時間がかかるが、地域は少しずつ前の態勢に戻りつつある。災害公営住宅の建設などで、多くの方にお世話になった。新年でもあり、少しでも気持ちを癒やしてほしい」とあいさつした。

同住宅の建設事業にかかわったUR都市機構釜石復興支援事務所の梅津武弘所長らもあいさつ。住宅用地を提供した唐丹町漁協の上村勝利組合長は、漁業関連施設の集約化など漁業の再生経過、展望を語った。

唐丹町の住宅復興事業に昨年3月まで1年半にわたり携わった福岡県北九州市職員の森田健さん(50)＝門司区役所まちづくり整備課工務係長＝は「釜石を離れて10カ月。『帰ってきた』という感じだ。住宅はきれいにできた。いち早く公営住宅ができたのは住民の熱意、チームワークによる。実現に少しでも力添えできたのはうれしい。この地域が少しずつでも復興するよう頑張ってほしい」と願った。

仮設から住民戻り〝再スタート〟

民謡、手踊り盛り上げる

夫婦2人で入居した花露辺出身の葛西登さん(75)は本郷地区で被災。自宅を流失し、大曾根の仮設住宅で暮らした。災害公営住宅には昨年12月21日に入居。「夫婦で暮らすには快適だ。寒くない。何より花露辺は海が見えるからいい」と満足している。

一方で、「漁具を置く仮設倉庫は離れた場所にある」と不便さを指摘する60代の漁業者も。「吟味して造ったお風呂場は広く、立派だった」と、失った自宅への心残りをつぶやく男性もあった。

釜石市を支援する演歌歌手天童よしみさんは、唐丹町、鵜住居町の被災4校と花露辺町内会に支援金200万円を贈り、その目録が届けられた。

花露辺地区の災害公営住宅は2012年末に着工、ほぼ1年で完成した。用地約1400平方㍍に鉄筋コンクリート造り4階建て、延べ床面積1250平方㍍。住居部分は2階から4階に各4戸、1階に1戸の計13戸。間取りは全て2LDK(約60平方㍍)。1階に集会室、和室、調理室、トイレ、防災備品倉庫を配置、同地区の避難所機能も持たせた。

野田復興住宅 自治会設立持ち越し

出席者、過半数割り込む

コミュニティーづくり 難しさが浮き彫りに

釜石市文化財、新たに

市内文化財は